

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

二重目的語構文の使用頻度について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 二重目的語, 間接目的語, 直接目的語, 使用頻度 キーワード (En): 作成者: 井戸垣, 隆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006235

二重目的語構文の使用頻度について

井戸垣 隆

要 旨

英米の新聞記事と日本人学生の英語作文において、「二重目的語構文」が実際にどれ程の頻度で使用されているかを調査・分析した。間接目的語が人称代名詞の場合には、SVOA よりも SVOO が使われる傾向があり、「to + 人称代名詞」という形は極めて少ないということが、英米の新聞記事と日本人学生両方の共通点としてあげられる。英米の新聞記事では、give は、SVOA よりも SVOO 優位、lend は、SVOO よりも SVOA 優位、また、send、show、sell 等の動詞は、SVOO としての用法が非常に少ないということが判った。日本人学生に関しては、introduce や explain 等の非二重目的語動詞に対しても、SVOO 形式の英語文を書く者が多くいた。導入段階で、たいてい「SVOO と SVOA のどちらを使ってもよい」と教えられてきている日本人学生が、動詞や目的語の種類によって、どちらか一方にその使用が偏る場合があることが判明した。

キーワード：二重目的語、間接目的語、直接目的語、使用頻度

はじめに

本稿の目的は、英米の新聞記事および日本人学生の英語作文における「二重目的語構文」の調査を行い、それが実際にどのような頻度で使用されているかを分析することにより、英語学習段階にある日本人学生にこの構文を指導する際の指針・注意点を見つけ出すことにある。つまり、統語的に同じ内容を表すとされる SVOO (あるいは S + V + IO + DO) と SVOA (以下、A は「前置詞 + 間接目的語」の意味で用いる) の間接目的語が、普通名詞、固有名詞、人称代名詞の場合に応じてどのように使用頻度が異なってくるか、また、動詞によってどのような差が出てくるか、等について分析を行い、特に、日本人学生が使用する特有の構造や共通した誤りを検討していくこととする。

調査資料として、新聞記事に関しては、*The Guardian* (英国) の1996年版 (1年分)、および、*The Washington Times* (米国) の1995年版 (1年分) を使用し、日本人学生に関しては、筆者が2006年6月に行った大学生・短期大学部生243人を被験者とした英語作文を使用する¹⁾。

英語教育の現場で、「Tom は私に John を紹介しました」という文を日本人の英語学習者が、

Tom introduced me John. というような英語文にする例はしばしば見られるところであるが（詳しい数字は後述する）、これは、give や lend などの二重目的語動詞を学んだ日本人学習者が、同じ日本語構造（誰々に何々を～する）の類推から、二重目的語動詞ではない introduce にも応用しているためと考えられる。もっとも、非二重目的語動詞を SVOO として使用する誤りは、子供の英語母語話者に関しても起こることが報告されており、興味深い研究としては、Jess Gropen et al. (1989) によるものがある。そこでは、多音節の動詞よりも単音節の動詞の方が、過剰一般化（SVOO として使用）されやすいことや、話者がどのように二重目的語動詞の規則を習得していくかについてなどが論じられている。

与格交替（SVOO と SVOA の交替）の問題を扱ったものとしては、Arnold, et al. (2000) があるが、それによると、交替の要因は、grammatical complexity (heaviness) と、discourse status (newness) であるあることが、主張されている。日本語・英語対照の立場から、SVOO と SVOA の構造を論じたものとしては、影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』の第5章「二重目的語構文」があげられる。ここでは、与格交替の意味的制約、形態的・音韻的制約、談話情報の制約、統語的な制約といった観点から詳しく分析がなされている。本稿は、実際に使用された構文の数字（パーセント）の分析を中心に、論を進めていくこととする。なお、本来は、1文1文の文脈を考慮に入れて、なぜ SVOO と SVOA のどちらの構文が使われているかを検証していかねばならないわけであるが、本稿は、「使用頻度」というものに重きを置いているということから、文脈等を考慮した本調査に進むための、「予備調査」としての位置づけであることを断っておく。

I. 英米の新聞記事の調査結果

最初に、*The Guardian*（以下 GD）と *The Washington Times*（以下 WT）において、最も代表的な二重目的語動詞である give がどのように使用されているかを見ていきたい。調査方法としては、give が能動態として使用されたすべての文を検索し、GD、WT それぞれその最初から1,000件を分析するという方法を取ることとする²⁾。

表1が示すのは、give が二重目的語構文として使用された件数である。

表1 give が SVOO で使用された件数

目的語の種類	GD(1,000件中)	WT(1,000件中)	計(2,000件中)
give + 普通名詞 + 普通名詞	147 (14.7%)	162 (16.2%)	309 (15.5%)
give + 固有名詞 + 普通名詞	89 (8.9%)	138 (13.8%)	227 (11.4%)
give + 人称代名詞 + 普通名詞	234 (23.4%)	217 (21.7%)	451 (22.6%)
SVOO構文の合計	470 (47.0%)	517 (51.7%)	987 (49.4%)

目的語の種類のための代表的な例文としては、それぞれ、John gave the boy a book. John gave Tom a book. John gave me a book. のような形のものになる。調査の結果、give が能動態で使用された文全体の中で、約50%の割合で二重目的語構文が使用されていることが判明した。大修館書店『ジーニアス英和辞典』第3版等で、「間接目的語が代名詞の場合は SVOO が好まれる」(p.788) 旨の説明がなされているが、ほぼ、その記述通り、SVOO は間接目的語が人称代名詞の場合に最も使用頻度が高いことが判った（普通名詞と固有名詞を合わせると比率は人称代名詞をやや上回ることとなったが）。人称代名詞、つまり、me、us、him などのように短い語は前置される傾向があると言えるのであろうかどうかは、今から順次確かめていきたい。英米の違いに関しては、ほとんど現れていないと見える。なお、ここには、SVOA で書き換えることのできないもの、たとえば、give it a try (3件)、give it a go (3件)、give it a shot (2件)、のようなイディオム、あるいは、He gave me a look. といった形式の文（具体的な物の授受を表さないもの³⁾、等は除外している。

次に、「to + 間接目的語」として使用された文を見てみる。表2は、give が SVOA で使用された件数を示したものである。

表2 give が SVOA で使用された件数

目的語の種類	GD(1,000件中)	WT(1,000件中)	計(2,000件中)
give + 普通名詞 + to + 普通名詞	98 (9.8%)	122 (12.2%)	220 (11.0%)
give + 普通名詞 + to + 固有名詞	12 (1.2%)	16 (1.6%)	28 (1.4%)
give + 普通名詞 + to + 人称代名詞	1 (0.1%)	1 (0.1%)	2 (0.1%)
直接目的語が普通名詞の合計	111 (11.1%)	139 (13.9%)	250 (12.5%)
give + 代名詞 + to + 普通名詞	1 (0.1%)	4 (0.4%)	5 (0.3%)
give + 代名詞 + to + 固有名詞	2 (0.2%)	4 (0.4%)	6 (0.3%)
give + 代名詞 + to + 人称代名詞	2 (0.2%)	3 (0.3%)	5 (0.3%)
直接目的語が代名詞の合計	5 (0.5%)	11 (1.1%)	16 (0.8%)
SVOA構文の合計	116 (11.6%)	150 (15.0%)	266 (13.3%)

目的語の種類別の代表的な例文としては、それぞれ、John gave a book to the boy. John gave a book to Tom. John gave a book to me. John gave it to the boy. John gave it to Tom. John gave it to me. のような形のものになる。なお、ここには、give way to (24件) のようなイデオムや、give birth to (6件) 等のように give O birth のようには使用しない(『ジーニアス英和辞典』p.184 s.v. birth 成句見出し『give birth to』等参照)など、二重目的語構文で使うことができないものは除外している(また、He gave me. のような形で使われているものも省いているため、SVOO と SVOA の合計は、100%にはなっていない。つまり、表にあげたパーセントは、SVOO 対 SVOA ではなく、give の能動態での全ての使用に対してのものである)。ただし、間接目的語が長いために、あるいは、口調の関係等で、「to + 間接目的語」の形で後置されていても、理論上は二重目的語構文になりうると思われるものは(SVOO にすると極めて理解しにくくなる場合が起こりうるが)含まれている。直接目的語が代名詞(it, them)の場合は、John gave the boy it. のように SVOO で使用すべきではない(実例も皆無であった)とされているので、John gave it to the boy. のような形の文は別項目にした。

調査の結果判明したことは、give が SVOA で使用される割合は約13%で、SVOO に比べて非常に低くなったということである。John gave a book to the boy. のような「普通名詞 + to + 普通名詞」は、11.0%見られたが、「普通名詞 + to + 固有名詞」は1.4%に減少し、さらに、John gave a book to me. のような「普通名詞 + to + 人称代名詞」は、0.1%と使用例は極めて少なくなることが判った(me のような人称代名詞は、聞き手にとって旧情報であるので、「to + 人称代名詞」の形が使われにくくなることは、当然予想されることであったが、逆に、少ないながらも使用された場合の分析にあたっては、やはり、「文脈」等の考慮が必要になってくるものと考えられる)。ただし、直接目的語と間接目的語がどちらも普通名詞の場合に限っては、SVOO と SVOA の比率はかなり近いものとなっているとすることができる。また、直接目的語が代名詞の場合では、to 以下の名詞の種類にかかわらず、John gave it to me. といった文の使用例そのものも非常に少ないことが判った。参考のために、1,000件を超えて、give の能動態での全使用件数(GD 25,474件、WT 21,913件、計47,387件)を「to + 人称代名詞」に限って検索したところ、「普通名詞 + to + 人称代名詞」は、GD 38件、WT 23件、計61件(0.13%)で、「代名詞 + to + 人称代名詞」の場合は、GD 84件、WT 79件、計163件(0.34%)であった。英米の違いを示すと言えるものとして、英国のGDには、John gave it me. の形式の構造が、対象の1,000件の中には1件、全25,474件中、6件あった。米国のWTには、皆無であった。

次に、lend について見ていくこととする。lend が能動態で使用された総数は、GD 625件、WT 547件、合計1,172件と、主な二重目的語動詞の中では、使用件数が少なかった。ここでは、全件数を対象に分析を行う。表3は、lend が二重目的語構文で使用された件数を示して

いる。

表3 lend が SVOO で使用された件数

目的語の種類	GD(625件中)	WT(547件中)	計(1,172件中)
lend + 普通名詞 + 普通名詞	39 (6.2%)	35 (6.4%)	74 (6.3%)
lend + 固有名詞 + 普通名詞	18 (2.9%)	24 (4.4%)	42 (3.6%)
lend + 人称代名詞 + 普通名詞	79 (12.6%)	25 (4.6%)	104 (8.9%)
SVOO 構文の合計	136 (21.8%)	84 (15.4%)	220 (18.8%)

目的語の種類「lend + 普通名詞 + 普通名詞」は、John lent his friend a book. のような文を対象としている。give が、約50%の割合で二重目的語構文の使用があったの対比して、lend の場合は約20%という結果となった。同じ二重目的語動詞でもこのような開きが実際の使用で出ているということが判明した。また、表4で見ると、SVOA の形で使われている割合が、逆に約50%となっていることが判った。

表4 lend が SVOA で使用された件数

目的語の種類	GD(625件中)	WT(547件中)	計(1,172件中)
lend + 普通名詞 + to + 普通名詞	153 (24.5%)	181 (33.1%)	334 (28.5%)
lend + 普通名詞 + to + 固有名詞	32 (5.1%)	22 (4.0%)	54 (4.6%)
lend + 普通名詞 + to + 人称代名詞	1 (0.2%)	1 (0.2%)	2 (0.2%)
直接目的語が普通名詞の合計	186 (29.8%)	204 (37.3%)	390 (33.3%)
lend + 代名詞 + to + 普通名詞	66 (10.6%)	78 (14.3%)	144 (12.3%)
lend + 代名詞 + to + 固有名詞	32 (5.1%)	24 (4.4%)	56 (4.8%)
lend + 代名詞 + to + 人称代名詞	5 (0.8%)	4 (0.7%)	9 (0.8%)
直接目的語が代名詞の合計	103 (16.5%)	106 (19.4%)	209 (17.8%)
SVOA構文の合計	289 (46.2%)	310 (56.7%)	599 (51.1%)

give と共通するのは、John lent a book to me. のような形の、「普通名詞 + to + 人称代名詞」が、非常に少ないということである。やはり、人称代名詞のような短い語は前置される傾向があると、ここでも言うことができるが、SVOO での間接目的語における人称代名詞の使用率は give が lend を大きく上回っていた。give と lend の用法に関して、使用構文の割合に限って言えば、直接目的語と間接目的語がどちらも普通名詞のときは、「lend + 普通名詞 + to + 普通名詞」の使用が28.5%で、最も多いということが判った。英米の違いを示すものとして、lend に関しても、GD で John lent it me. の形の文が1件見つかった。

続いて、send について述べる。GD、WT において能動態で使われた全文検索のそれぞれ最初の1,000件、計2,000件を対象として分析する。send が、SVOO で使用されたのは GD、WT 合わせて124件、6.2%というものであった。その中でも、John sent her a letter. のような「人称代名詞 + 普通名詞」の形が、98件、4.9%を占めていた。send は、give や lend と比較して、二重目的語構文としての使用が非常に少ないことが判った。SVOA に関しては、直接目的語が普通名詞の場合は、GD、WT 合わせて、856件、42.8%と、より多く使用されていることが判明した。しかしながら、直接目的語が代名詞の場合は、88件、4.4%という数字が示すように、John sent it to his friend. のような形式の文は、非常に少ないということが判った。

二重目的語動詞としての用法があるはずの show に関しては、意外な結果が出た。SVOO、SVOA とともに使用率が低かった。つまり、「誰に」を示さない SVO としての用法が主であった。show の SVOO での使用は、GD、WT の合計2,000件中、96件、4.8%であった。John showed his friend a picture. のような「普通名詞 + 普通名詞」は、19件、1.0%で、John showed Tom a picture. のような「固有名詞 + 普通名詞」はわずか3件、0.15%であった。John showed me a picture. のように間接目的語が人称代名詞の場合に、74件、3.7%と使用率がやや多くなるという結果となった。SVOA に関しては、John showed a picture to his friend. のような「普通名詞 + to + 普通名詞」の形式は1件、0.05%、John showed a picture to Tom. のような「普通名詞 + to + 固有名詞」の形式は4件、0.2%、John showed a picture to me. のような「普通名詞 + to + 人称代名詞」の形式は2件、0.1%であった。また、直接目的語が代名詞の場合は、to 以下の名詞の種類にかかわらず0件という結果となった（もちろん、I will show it to you. のような形が全く使用されないはずはないと考えられたので、show の使用例を50,000件まで拡大して検索したところ、「代名詞 + to + 名詞」の形は、90件、0.18%が見つかった¹⁾）。

次に、SVOA 構文を使用したときの前置詞に to ではなく、for を取るとされている二重目的語動詞の buy について見ることにする（真の二重目的語構文は、「to + 間接目的語」で書き換えることができるものに限定すべきであると言うことができるが、普通、英語教育においては、SVOA の前置詞に for を使う動詞が、二重目的語動詞として扱われ、また、後述する日本人学生の調査でも混乱が見られることから、実際の使用数を確かめるという目的で調査を行うこととした）。調査の結果、buy は、SVO としての用法が主で、SVOO、SVOA のどちらも使用例が非常に少ないことが判明した。SVOO は、GD、WT の合計2,000件中、36件、1.8%で、そのうち、John bought her a car. のような間接目的語が人称代名詞の場合が、29件、1.5%を占めていた。SVOA は、2,000件中、わずか12件、0.6%で、John bought it for his daughter. のような直接目的語が代名詞の場合は、1件、0.05%という結果となった。直接目的語が代名詞の場合の全使用例を検索したところ、buy の能動態での全使用件数24,085件に対して、John

bought it for his daughter. のような形の文は、for 以下が、普通名詞6件、固有名詞0件、人称代名詞11件であった。

SVOA 構文の前置詞に for を取るものとしては、他に、build、cook、find、get、knit、等があるが、ここでは、make を代表として見てみることにする。予想されることではあったが、GD、WT それぞれ最初の1,000件には、make の SVOO での使用は皆無であった（SVO や SVOCは多く見られたが）。また、「make + 名詞 + for + 普通名詞」も GDに1件あるだけであった。そこで、今度は、GD、WT のそれぞれ1年分を使って、make との組み合わせを次の名詞に限って検索を行った。cake/cakes、coffee、tea、cookie/cookies、candy/candies、breakfast、lunch、supper、dinner、meal/meals、sandwich/sandwiches、pizza/pizzas、hamburger/hamburgers。make の能動態での全使用件数は、GD 40,577件、WT 37,190件、計77,767件で、そのうち、上であげた名詞を伴う SVOO 構文、たとえば、John made me some coffee. のような文での使用は、わずか30件、0.04%という結果となった。また、SVOA での使用件数は、全件中20件、0.03%であった。「make + O + for 人」というのは、O が、名詞、代名詞にかかわらず極めて使用頻度が低いということが判明した。

次に、teach について見ることにする。teach に関しては、「teach + 名詞 + that 節」や「teach + 名詞 + how to do」の形で使われたものが、GD、WT の合計2,000件中、212件、10.2%あったが、これを除外した SVOO での使用は、234件、11.7%であった。また、そのうち、間接目的語が人称代名詞の場合が147件、7.4%であった。SVOA での使用は、2,000件中、43件、2.2%で、目的語が代名詞の場合は、わずか4件、0.2%であった。John taught it to Tom. のような「代名詞 + to + 固有名詞」は、皆無で、John taught it to his friend. や John taught it to me. のような「代名詞 + to + 普通名詞」と「代名詞 + to + 人称代名詞」がそれぞれ2件ずつあるだけであった。英米の違いとしては、GDに John taught us it. のような形式の文が1件見つかった。

次に、tell について述べる。GD、WT の合計2,000件中、SVOO（直接目的語が節ではなく、「普通名詞」の場合）での使用は、184件、9.2%であった。また、「tell + 名詞 + that 節」の使用が、694件、34.7%で、John told Tom to go there. のような「tell + 名詞 + to do」の形式は、102件、5.1%であった。間接目的語が人称代名詞のときは、John told me the truth. のような SVOO の形式が、149件、7.5%で、John told me about the truth. のように about を含むケースは、66件、3.3%であった。John told his friend the truth. や John told Tom the truth. のように間接目的語が、普通名詞、固有名詞で、about を含まないケース（SVOO）は、それぞれ、14件、0.7%と、9件、0.5%であったが、John told his friend about the truth. や John told Tom about the truth. のように about が含まれるケースが、それぞれ、20件、1.0%、と9件、0.5%という割合になっていた。SVOA に関しては、John told the truth to his friend. のような

「名詞 + to + 普通名詞」の形は、9件、0.45%で、John told the truth to Tom. のような「名詞 + to + 固有名詞」の形が、3件、0.15%であったが、John told the truth to me. のような「名詞 + to + 人称代名詞」の形が、0件という結果になった。また、直接目的語が代名詞の、John told it to his friend. や、John told it to Tom. のような形も0件であり、John told it to me. のような「代名詞 + to + 人称代名詞」の形がわずか1件、0.05%あるだけであった（さらに、50,000件まで拡大して検索したところ、「代名詞 + to + 普通名詞」が、11件、0.022%、「代名詞 + to + 固有名詞」が、5件、0.01%、「代名詞 + to + 人称代名詞」が、6件、0.012%のような結果となった）。

続いて、sell について述べておく。GD、WT 合計2,000件中、SVOO での使用は、21件、1.1%で、そのうち間接目的語が人称代名詞の場合が、17件、0.9%を占めていた。SVOA は、直接目的語が普通名詞の場合が、51件、2.6%で、代名詞の場合が、43件、2.2%であった。いずれにしても、SVOO、SVOA どちらの使用も少ないことが判明した。

次に、英語教育で、前置詞は to か for のどちらかを使って書き換えるとされている bring について述べる。bring は、GD、WT の合計2,000件中、SVOO での使用は、62件、3.1%であった。また、そのうち、間接目的語が、人称代名詞の場合が、52件、2.6%を占めていた。bring は二重目的語構文としての使用はかなり少ないことが判明した。SVOA に関しては、The waiter brought some water to the customer. のような「名詞 + to + 普通名詞」の場合が406件、20.3%であった。しかしながら、to 以下が人称代名詞の場合は、わずか4件、0.2%であった。直接目的語が代名詞の場合、The waiter brought it to the customer. のような「代名詞 + to + 普通名詞」の形は、57件、28.5%で、The waiter brought it to me. のような「代名詞 + to + 人称代名詞」の形は、わずか、1件、0.05%であった。前置詞 for が使われたケースは、「bring + 名詞 + for + 普通名詞」として、GD と WT にそれぞれ3件ずつ、計6件のみであった。

次に、二重目的語動詞としての do はどのように使われているのであろうかを見ていきたい。ここでは、do と、harm あるいは damage との組み合わせで使われたケースを分析することにする。GD、WT の全文を検索したところ、上記の組み合わせの使用例は、合計920件で、そのうち SVOO での使用は、160件、17.4%であったが、The storm did us damage. のような、間接目的語が人称代名詞の場合が120件、13.0%を占めていた。SVOA は、合計234件、25.4%であった。内訳は、The storm did damage to the farmers. のような to 以下が普通名詞の場合が、191件、20.8%で、to 以下が固有名詞の場合が、22件、2.4%、そして、to 以下が人称代名詞の場合が、21件、2.3%となっていた。harm、damage が代名詞 it となって「do it to ~」という使い方がされているかであるが、用例は皆無であった。前の名詞を受けて、it が「do it to ~」という形で使われたものは、「to + 普通名詞」20件、「to + 固有名詞」10件、「to + 人称代名詞」18件であった。

英米の新聞記事に関する調査の最後として、ask について見ていくこととする⁹⁾。ask に関しては、SVOO や SVOA としての使い方よりも、他の用法が優勢を占めていた。ここでは、ask と question/questions が組み合わされて使われた全ての件数、GD 929件、WT 763件、合計1,692件における割合に限って述べることにする。ask と question の組み合わせは、多くが、「(誰々に)」を含まない John asked a question. のような形で使われていることが判った。The students asked their teacher questions. のような SVOO の形は、1,692件中、275件、16.3%であった。そのうち、The students asked him questions. のように人称代名詞が使用されたケースが、228件、13.5%を占めていた。なお、人称代名詞のうちの GD 37件、WT 25件、計62件は、oneself 形の再帰代名詞として使用されていた。The students asked questions to their teacher. のように前置詞 to が使用された形は、もちろん皆無であった(後に述べる日本人学生の場合は、多くがこの形を使っていた)が、of their teacher のように前置詞 of が使われた形は、1,692件中、29件、1.7%であった。そのうち、of 以下が普通名詞の場合が、19件、1.1%であった。John asked it of Tom. のように、it が question を受けて使われている例は、わずか1件(WT)、0.05%あるだけであった。

II. 日本人学生の英語作文の調査結果

これより、日本人学生の英語作文において、二重目的語構文がどれほどの割合で使用されているのかを見ていくことにする。表5は、日本人学生に「John は昨日私にスペイン語の本をくれました」という文を英語に訳させたものを、SVOO か SVOA かの構文形式に従って分類したものである。それぞれ、代表的な例文と使用人数を示している。

表5 give を使用した日本人学生の英語作文結果

使用構文例	日本人学生の人数 (243人中)
John gave me a Spanish book yesterday.	221人 (91.0%)
John gave a Spanish book to me yesterday.	10人 (4.1%)

調査の結果、John gave me a Spanish book yesterday. のように SVOO とした者は、243人中221人で、91.0%であることが判明した。John gave a Spanish book to me yesterday. のように、SVOA とした者は、10人で、4.1%であった。また、SVOA の前置詞は、本来は to を使うべきものとされているが、for を使用した者は、8人、3.3%いた。(前置詞使用者が、合計としては18人、7.4%いたことになるが、to と for の使用者の内訳としては、少数ながら接近したものとなった。また、人数の差はあれ、これから見ていく全ての動詞に to と for の使用者が

必ず存在することとなった。) なお、John gave to me a Spanish book yesterday. のような語順 (倒置) にした者が、3人、1.2%いたが、これらは John gave a Spanish book to me yesterday. の範疇に入れている。for me の倒置は1人、0.4%であった。日本人学生の学習過程に関しては、詳しく調査をしていく必要があるが、実際の英語作文において、SVOO、SVOA それぞれの構文の使用には大きな差が出ていることが判った。間接目的語が人称代名詞の場合は SVOO がより好まれると言えるのであろうかどうかは、今から確かめていくこととする。

give について他の文はどうなるかを見るために、「私達は全ての旅行者に地図を渡すつもりです」という文を書かせたところ (間接目的語は長く、直接目的語は短くなることを意図した)、We are going to give all the tourists a map. のような SVOO の形にした者は、102人で42.0%であった。We are going to give a map to all the tourists. のような SVOA の形にした者は、91人で37.5%であった。しかしながら、SVOA で、前置詞に for を使ったものが、25人、10.3%おり、前置詞使用者は合わせると、116人、47.7%で、SVOO の使用者の数を上回るものとなった。間接目的語が代名詞の場合は、SVOO が優勢であったのに対して、間接目的語が普通名詞の場合は、SVOO と SVOA の割合が接近するものとなった。さらに、関係節の場合はどのようになるかを見る目的で、「これは友達が去年私にくれた犬です」の文を与え、This is the dog my friend gave me last year. のように、give と me が連続する環境になるように作文させたところ、gave me とした者は、182人で、74.9%であった。gave to me のように前置詞 to を使用した者は11人、4.5%で、前置詞 for の使用者は5人、2.1%という結果になった (後で述べる buy に関しては、関係節で for が使われる傾向があるのとは違った結果となった)。

次に、lend について見ていくこととする。表6は、「MaryはTomに音楽のCDを貸してあげました」という文を英語に訳させた結果を表したものである。それぞれ、SVOO と SVOA の代表的例文と使用人数を示している。

表6 lend を使用した日本人学生の英語作文結果

使用構文例	日本人学生の人数 (243人中)
Mary lent Tom a music CD.	141人 (58.0%)
Mary lent a music CD to Tom.	78人 (32.1%)

Mary lent Tom a music CD. のように SVOO を使用した者は、141人、58.0%であった。Mary lent a music CD to Tom のように SVOA を使用した者は、78人、32.1%で、前置詞 for の使用者は9人で3.7%であった。また、Mary lent to Tom a music CD. のように倒置の文にした者が、11人、4.5%いた (for での倒置は、皆無であった)。

英米の新聞記事と共通することは、二重目的語構文使用の比率が、lend の場合は、give と

比較してかなり低くなっているということである。それに伴い、SVOA の形の使用の割合が増えている。関係節ではどうなるかを見るために、「Lisa が Bob に貸してあげたビデオはあまり面白くありません」を英語訳させたところ、The video Lisa lent Bob isn't very interesting. のようにした者は、100人、41.2%であった。to Bob のように前置詞 to を入れた者は70人、28.8%で、for Bob のように前置詞 for を入れた者は、4人、1.7%であった。なお、英語作文において、関係節を使わなかったり、使った場合でも、Lisa lent Bob a video which was not very interesting. のような形にした者がいたが、「対応する日本語文」との違い、および、今回の調査目的とは別次元という理由から、これらは数字から除外している。ただし、関係詞節が後置されるかどうかということは、重要な問題を含んでいるものと考えられるので、今後の調査の参考としていきたい。

続いて、send について見ていくこととする。send に関しては、「その息子は両親に長い手紙を送りました」という文を英語訳させた。The son sent his parents a long letter. のようにSVOO を使用した者は、85人、35.0%で、The son sent a long letter to his parents. のようにSVOA を使用した者は、118人、48.6%であった。for his parents のように前置詞 for の使用者も27人、11.1%いた。また、sent to his parents a long letter のように倒置した者が8人、3.3%いた。英米の新聞記事では、SVOO が約6%と少なかった（間接目的語が普通名詞と固有名詞の場合は、1.3%であった）のと対比して、日本人学生の場合は、比較的高い割合でSVOO を使用していることが判った。

次に、show について見ていく。英米の新聞記事には SVOO も SVOA も非常に少なかったわけであるが、日本人学生に与えた日本語はどちらかの構文を使用させるものとしている。show に関して、人称代名詞を使わせる環境では、SVOO が最高の数を示した。「あなたに美しい絵を見せてあげましょう」という文を英語訳させたところ、I will show you a beautiful picture. のように SVOO とした者が、225人、92.6%いた。I will show a beautiful picture to you. のように SVOA とした者は、わずか3人、1.2%で、for you とした者も7人、2.9%であった。自然環境（自由英語作文等）での使用はどのようになるであろうかは、今後検証していくこととする。

次に、SVOA の前置詞に for を使うとされている buy について見てみる。buy に関しては、「Brown さんは娘に新車を買ってあげるつもりです」のように「～してあげる」という日本語を使った文で、英語訳させた。Mr. Brown is going to buy his daughter a new car. というような SVOO の形にした者は、50人、20.6%であった。前置詞に to を使用して、Mr. Brown is going to buy a new car to his daughter. のようにした者は35人、14.4%であったが、前置詞 for を使用して、Mr. Brown is going to buy a new car for his daughter. のようにした者は、SVOO を大きく上回り、149人、61.3%という結果となった。

buy については、関係節を使う文も作文させた。「Jack がガールフレンドに買ってあげた時計は非常に高価です」を英語訳させたところ、The watch Jack bought his girl friend is very expensive. のように関係節部分に SVOO を使用した者は、49人、20.2%であった。ところが、SVOA を使って、The watch Jack bought for his girlfriend is very expensive. のように前置詞 for を入れた者は、91人、37.5%であった。give の場合に、(間接目的語が人称代名詞と普通名詞では単純比較はできないが) gave me のようにするのが大半で、gave to me のような前置詞使用が好まれなかったのに対して、buy については、bought for his girlfriend のように前置詞が使われることが多いということが判った。lend を使った関係節の文で、The video Lisa lent Bob isn't very interesting. が、lent to Bob を少し上回っていたが、buy の場合には、前置詞 (for) が使われる傾向にあるという結果となった。

次に、make について見てみることにする。前置詞に関する問題は、make で顕著になった。日本人学生に「毎週日曜日に母は子供達においしいケーキを作ります」という文を英語訳させたところ、Every Sunday Mother makes her children delicious cake. のように SVOO の形を使った者は、30人、12.4%であった。makes cake to her children のように SVOA で、前置詞 to を使用した者が、31人、12.8%であったのに対して、makes cake for her children のように前置詞 for を使用した者は、165人、67.9%という結果となった。調査の日本語は全て「～に」であって、「～のために」は全く使用してはいるが、for が優位を占める結果となった。

続いて、teach について見てみる。teach に関しては、「Schneider 先生が私達にドイツ語を教えています」という文を英語に訳させたところ、Mr. Schneider teaches us German. のように SVOO の形を使った者は、191人、78.6%で、Mr. Schneider teaches German to us. のように SVOA にした者は、31人、12.8%で、前置詞 for を使用した者は、9人、3.7%であった。間接目的語が代名詞の場合には SVOO が優勢という傾向がここでも確かめられた。次に、「誰があなたのお兄さんに数学を教えていますか」という文を英語に訳させたところ、Who teaches your brother math? のように SVOO の形にした者が、88人、36.2%、to your brother のように SVOA の形にした者が、98人、40.3%、for your brother のようにした者が、24人、9.9%であり、SVOA の方が上回るという結果となった。

次に、tell について見ていくことにする。「Steve は Jane に真実を話しました」という文を英語訳させたところ、Steve told Jane the truth. のように SVOO とした者は、154人、63.4%であった。Steve told the truth to Jane. のように SVOA とした者は、61人、25.1%であった。前置詞に for を使用して for Jane のようにした者は6人、2.5%であった。英米の新聞では、あまり使われることのなかった「tell + 固有名詞 + 普通名詞」(0.45%) や「tell + 普通名詞 + to + 固有名詞」(0.15%) を使用するようにして英語訳させる方法には議論の余地があるが、結果としては、SVOO 優位ということになった。

次に、sell について見てみる。「Bill は友達に車を売るつもりです」という文を英語訳させたところ、Bill is going to sell his friend his car. のように SVOO とした者は、29人、11.9%であったが、Bill is going to sell his car to his friend. のように SVOA とした者は、162人、66.7%で、間接目的語が名詞の場合で、to が使われた最大の数字となった。for his friend とした者も36人、14.8%であった。

続いて、bring について見てみることにする。「ウェイターは私達に水を持ってきてくれました」という文を英語訳させたところ、The waiter brought us some water. のように SVOO とした者は147人、60.5%で、The waiter brought some water to us. のように SVOA とした者は47人、19.3%で、前置詞 for を使用した者は32人、13.2%であった。to と for が使われた比率は、65%対35%で、to の方が多いという結果となったが、本来 to を使うべきとされている他の二重目的語動詞と比較した場合に、for 使用率はより高いものとなった。

次に、SVOO の形を取らないとされている⁶⁾、introduce を使って、「叔父は私にオーストラリアからの留学生を紹介してくれました」という文を書かせたところ、My uncle introduced me an international student from Australia. のようにした者が、110人もいた。45.3%である。My uncle introduced an international student from Australia to me. のように正しいとされている文にしたものは、72人で29.6%であった。また、前置詞 for を使用した者は9人、3.7%であった。My uncle introduced to me an international student from Australia. のように倒置を行った者は、11人、4.5%、for の倒置は1人、0.4%いたが、目的語の長さが影響を与えているものと考えられる。なお、My uncle introduced me to an international student from Australia. は英語文の構造としては正しく、27人、11.1%いたが、与えた日本語とは意味が異なっているので、数字からは除外している。

日本人学生に特有のケースと考えられるもう1つの動詞 explain について述べておく⁷⁾。explain は二重目的語動詞ではないので、John explained me the situation. のような文は誤りであるとされている。日本人学生に、「Mike は友達にフットボールのルールを説明しました」という文を英語に訳させたところ、Mike explained his friends the rules of football. のように SVOO の形にした者が、55人、22.6%もいた。もしも「友達に」の部分「私に」のように人称代名詞にしていた場合には、SVOO の数がさらに上回っていたことが予想される。Mike explained the rules of football to his friends. のように正しいとされる形にした者は、126人、51.9%であったが、動詞の用法を正確に理解した上で、この文を書いたかどうかは、疑問が残るものとなった。for his friends のように前置詞 for を使用した者は、20人で8.2%であった。Mike explained to his friends the rules of football. のような倒置の形にした者は、9人、3.7%で、倒置文での for の使用者は、1人、0.4%であった。

これまでの調査結果から、日本人学生の英語作文においても、間接目的語に人称代名詞を使

う場合は、SVOO の形が優位を占めていることが、実際の数字をあげることで確かめられた。間接目的語と直接目的語にそれぞれ人称代名詞と代名詞が使われた場合にどのようになるかを確かめるために、「私にそれを渡して下さい」という文を hand を使って英語訳させた（代名詞に it を使用した者のみを対象とし、give me that などは対象外とする）。Hand me it. とした者が、57人、23.5%いた。Hand it to me. とした者は80人、32.9%で、Hand it for me. とした者は、1人、0.4%であった。Hand it to me. とした人数が Hand me it. の人数を上回ってはいるが、英米ともに、まれとされている用法（『英文法解説』 p. 190等参照）を日本人学生が多く使用しているのは興味の持たれるところである。なお、参考のために、「有生の人称代名詞（me, you, us, him, her, them）＋無生の代名詞（it, them）」の使い方がなされているかどうかを、GD、WT、それぞれ1年分、全ての動詞を対象として検索してみたところ、GD に、give me it が2件、WT に、give you them が1件見つかっただけであった。

do の二重目的語動詞としての使用に関しては、「その嵐は人々に大きな損害を与えました」という文を英語訳させた。The storm did people great damage. のように SVOO を使用した者は、44人、18.1%で、The storm did great damage to people. のように SVOA を使用した者は86人、35.4%で、前置詞 for を使用した者は、18人、7.4%であった。

最後に、ask について見てみる。「学生達は先生にたくさんの質問をしました」という文を英語訳させたところ、The students asked their teacher many questions. のような SVOO の形を使用した者は、136人、56.0%であった。The students asked many questions to their teacher. のように SVOA とした者は、67人、27.6%、前置詞 for の使用者は、13人、5.4%であった。The students asked many questions of their teacher. のように of を使用した者は皆無であった。ask には「誰かに向けて（質問を発する）」ではなく、「～から答えを引き出そうとする（in order to get an answer）」（*Longman Dictionary of the English Language* 4th ed. p. 80 等参照）という意味合いがあるため、前置詞 to は使われないわけであるが、日本語では「～に尋ねる、～に聞く、～に質問をする」のように、「～に」を使うことが影響を及ぼしていると考えられる。

これまでの調査の結果、間接目的語が人称代名詞の場合は、全て SVOO が優位を占めているということが判明した。ただし、今回は、全ての動詞に対して、間接目的語が普通名詞や固有名詞となるような作文はさせていない。調査範囲内で述べると、間接目的語が名詞の場合に、SVOO よりも SVOA が優位を占めた動詞は、send、buy、make、teach、do、sell であった。なお、前置詞 for を give に使った数を足せば、give も間接目的語が名詞の場合に、SVOA 優位ということになる。また、逆に、間接目的語が名詞であるのに、SVOO が優位となった動詞は、lend、tell、ask であった。このことは、動詞の種類だけでなく、間接目的語の長さの影響も考慮に入れる必要があるであろうが、この問題に関しては今後の課題としたい。

日本人学生が、どのような英語文を書くかは、教科書や参考書にどのような記述がなされているか、またどのように学習してきたか、等の影響を考慮に入れなければならないわけであるが、多くが「SVOO と SVOA のどちらを使ってもよい」と学んできた中で今回の調査結果は非常に興味を持てるものであると行うことができるであろう⁸⁾。また、今後、日本人学生を指導するにあたっては、英米の新聞等における実際の使用の数字を参考にしていくことも重要になってくるものと考えられる。

おわりに

本稿の調査は、冒頭で述べたように、SVOO と SVOA の実際の使用率を数字で表すことに重点を置き、文脈等をあえて考慮することなく論を進めてきた。母語話者ならびに日本人英語学習者の英語文を分析するにあたり、文脈というものは、非常に重要な要素とみなされるわけであるので、今後、特に、日本人学生に対して取り組んでいかなければならない調査としては、たとえば、「私は John に本をあげた」における「本」を、a book (新情報)、the book (旧情報) になるような環境を与えた場合に、どのような構造の文を作るのか、I gave John a book. や、I gave the book to John. のような使い分けがなされるであろうか、また、「John」が、新情報か旧情報かでどのように変わってくるか、等についてのものである。また、母語話者の英語文の分析にあたっては、文脈に加えて、今回扱わなかった問題であるが、目的語の長さ(語数および文字数)による割合、すなわち、SVOO と SVOA における間接目的語と直接目的語の平均語数や最大語数とそのバランス、さらに、受動態の使用比率や前置詞の有無、等について、調査・分析をしていきたいと考えている⁹⁾。

注

- 1) 学年の内訳は、学部1年26人、学部2年2人、学部3年46人、学部4年29人、短期大学部1年107人、短期大学部2年33人である。なお、本調査を行うにあたり、岡田啓、町田哲司、西村公正各氏の協力を得ました。ここに厚く感謝申し上げます。
- 2) 具体的には、give、gives、gave、have given、has given、had given の形で使用されたものを調査し、受動態や動名詞として使用されたものを除外した。総数は、GD 25,474件、WT 21,913件であった。
- 3) 江川泰一郎『英文法解説』p.190 等参照。
- 4) たとえ、1,000件を検索して、0件であっても、10,000件では10件を越すような場合もあると考えられるわけであるので、特に使用率1%未満の用例の統計的な精度については、調査方法に関して再検討をしていかなければならないと考えている。

- 5) もちろん、ask は他の二重目的語動詞とは、性質が違う。John asked Tom. や John asked a question. と言うことができるように、John asked Tom a question. の2つの目的語は、どちらも直接目的語であるとも考えることもできるわけであるが、ここでは論じない。
- 6) たとえば、石黒昭博『総合英語 Forest』には、目的語を2つ続けることができない動詞として、say、explain、introduce、suggest があげられている (p. 44)。
- 7) ただし、たとえば、Quirk et al. *A Comprehensive Grammar of the English Language* には、A borderline case is ? *He explained me his plan, which is acceptable to some speakers, but not to others.* (p. 59) のような記述がなされている。
- 8) 導入に関して、以下に高等学校用のいくつかの教科書の記述を載せておく。

三省堂 *The CROWN English Series I* New Edition, 2002 には、次のようにある。「第4文型」(SVOO)に含まれる2つの「目的語」のうち、先行するものは「間接目的語」、後続するものは「直接目的語」と呼ばれる。「間接目的語」の方は、「to + (前置詞の) 目的語」(動詞によっては、「for + (前置詞の) 目的語」という形で書き直すことができる。John gave Mary a book. → John gave a book to Mary. John bought Mary a hat. → John bought a hat for Mary. (p. 12)

池田書店 *DAILY ENGLISH COURSE I* Revised Edition, 2002 には、次のようにある。第4文型「S+V+O+O」—— 動詞のあとに、目的語が2つ続く文。a) Can you lend me ten dollars until tomorrow? b) Show me your new dress, Ann. c) Mrs. Black made the children some cakes. Note この文型に用いられる主な動詞。① to を用いて言いかえられるもの —— give, bring, show など。Henry brought coffee to me. ② for を用いて言いかえられるもの —— buy, find, make など。Jane bought some flowers for her mother. (p. 20)

第一学習社 *Vivid Writing*, 2005 には、次のようにある。S+V+O (人) +O (物) を S+V+O (物) の文型で表すときは、前置詞に注意しよう。He gave me some flowers. (彼は私に花をくれた。) cf. He gave some flowers to me. She made me a cup of coffee. (彼女は私にコーヒーを入れてくれた。) cf. She made a cup of coffee for me. (p. 8)

三省堂 *EXCEED English Series II*, 2003 には、SVOO の例文として、She teaches the newcomers Japanese. が、あげられており、SVOO の文型によく使われる主な動詞として、ask、buy、give、lend、pay、sell、send、show、teach、tell、write が列挙されているが (p. 10)、SVOA への書き換えや、使用する前置詞に関しては全く言及されていない。

文英堂 *UNICORN ENGLISH COURSE I*, 2005 の「5文型」の例文には、第4文型として、A Korean friend sent me an e-mail yesterday. <S+V+O+O> → 目的語が2つ必要 (p. 11)、とのみ記されているだけで、書き換え等に関しては言及されていない。

その他多くの教科書も同様の記述で、「SVOO」は「SVO+前置詞+O」で書き換えることができるという旨の説明のみで、どのように使い分けるかを教示したものはまったく見つからない。

- 9) 受動態に関して、参考のために少し述べておく。give の直接目的語が主語となった、A book was given to me. のような受動態の文がどれほどあるかを、to 以下を人称代名詞に限定して調べたところ

(それぞれ1年分)、GD 110件、WT 72件が使用されていることが判明した。ところが、A book was given me. のように to を伴わない形の文は、GD 5件、WT 1件、計6件のみであった。

参考文献

- Arnold, Jennifer E., Thomas Wasow, Anthony Losongco, and Ryan Ginstrom. "Heaviness vs. Newness: The Effects of Structural Complexity and Discourse Status on Constituent Ordering," *Language* 76, 1: 28-55, 2000.
- Beck, Sigrid and Kyle Johnson. "Double Objects Again," *Linguistic Inquiry* 35, 1: 97-124, 2004.
- Eastwood, John. *Oxford Guide to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- 江川泰一郎『英文法解説』金子書房, 1991.
- 福地肇『新英文法選書第10巻 談話の構造』大修館書店, 1985.
- Gropen, Jess, Steven Pinker, Michelle Hollander, Richard Goldberg, and Ronald Wilson. "The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English," *Language* 65, 2: 203-257, 1989.
- Hale, Ken and Jay Keyser. "On the Double-Object Construction," ms. MIT, 1997.
- Harley, Heidi. "Possession and the Double Object Construction," *Linguistic Variation Yearbook* 2, 1: 31-70. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2002.
- 石橋幸太郎『英語語法大辞典』大修館書店, 1966.
- 石黒昭博『総合英語 Forest』4th ed. 桐原書店, 2005.
- 影山太郎『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 2001.
- 松浪有他『大修館英語学事典』大修館書店, 1983.
- 松浪有『英語学コース [2] 英文法』大修館書店, 1988.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman, 1985.
- 大塚高信・中島文雄『新英語学辞典』研究社, 1989.
- Swan, Michael. *Practical English Usage*. New Edition. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- 鷹家秀史・林龍次郎『詳説レクシスプラネットボード』旺文社, 2004.
- 綿貫陽他『ロイヤル英文法』旺文社, 2000.

(いどがき・たかし 短期大学部助教授)